2023年10月1日（聖霊降臨後第18主日、特定21、A年）

牧師メッセージ

「お前たちは立ち帰って、生きよ」

（マタイによる福音書21:28-32）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音でイエスがたとえ話をしている相手は祭司長や長老たちです。いわゆる宗教的権威者であった彼らは、自分たちは律法をよく知り、律法をよく守っている自負があったことでしょう。その彼らは、このたとえでは「弟」の方です。弟は応えました。「お父さん、承知しました。」この言葉は、「わたしは準備できています、主よ」と訳すことができます。つまり、「主よ、わたしはいつでもOKですよ」というような自信に溢れた言葉です。たしかに、彼らは神の指示に従おうという気持ちを持っていたに違いありません。しかし、実際に人間は神の指示を、神が望むように、完全に果たし得るのでしょうか。もしそんなことができるなら、人間はとっくに神に立ち帰り、この世界には平和が実現しているはずですが、それができないから、今のこの世界の現実があるのです。にも関わらず、その現実を造り出しているのが他でもない自分であることを認めることができないことこそ、人間の罪深さであり、弱さです。ですから、この「弟」は返事こそ威勢が良かったものの、実際にはそれを実行する力がないために、出かけることができませんでした。

さて、他方「兄」は「徴税人や娼婦」と重ねられています。当時の世間の常識では、律法を果たさない者は救われない者とされ、軽蔑されました。そのような存在の象徴が徴税人であり、娼婦です。社会的立場は、祭司長や長老たちと対局に置かれています。誰もが徴税人や娼婦たちよりも、正しいのは祭司長や長老だと言うでしょう。しかし主イエスは言います。「はっきり言っておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。」なぜなら、「ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは神を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。」と主イエスが言われる通り、「悔い改めよ。天の国は近づいた」というヨハネの呼びかけを徴税人や娼婦は聴いたからです。ヨハネの言葉を受け入れた徴税人や娼婦たちは、自分たちが神の御心にかなっていないことを自覚していたのででしょう。それゆえ、「兄」のように、はじめは「いやです」と言って、主の道から外れています。しかし同時に、自らの生き方に痛みを感じていたのででしょう。その痛みゆえに、後から考え直すことができました。傷が救いの入口になる、とでも言いますか、自らの姿を素直に見つめるところに、悔い改めは起こるのです。

徴税人や娼婦たちのように、自分の過ちを勇気を持って見つめ、それを認めるとき、その過ちは恵みに出会うための機会へと変えられます。わたしたちが今日、自らの過ちを認め、自分の正義ではなく神の正義に立ち帰るなら、わたしたちのどのような過去も、神に出会うための恵みへと変えられます。